明治の群像・断片［その7］

異色の駐米総領事 水野幸吉

石田　三雄

ワシントンのポトマックとニューヨークのハドソンの両河畔に日本の桜が植樹されてから、来年（2012）で丸100年となる。最近、日米で盛大な「100周年記念桜祭り」が計画されているようだ。この日本の国花の寄贈を企画し、実現に努力した米国の二人の淑女、写真家・作家シッドモアとタフト大統領夫人、そして在米の科学実業家・高峰譲吉博士のことはかなりよく知られている。しかし、もう一人、この人がいなかったらと思うカギの人物、当時の総領事・水野幸吉の働きは、全くといっていいほど知られていない。

●正夢を伝える返事届く

今から102年前、1909（明治42）年４月７日、ホワイトハウスからの１通の手紙が53歳のアメリカ人女性エライザ・R・シッドモア（Eliza R. Scidmore、注１）の手元に届いた。シッドモアは旅行家兼文筆家、またプロの写真家として、当時すでに首府ワシントンの社交界の華で、後に写真誌で有名なナショナル・ジオグラフィック社（National Geographic Society）の最初の女性取締役を勤めた人であった(1)。

ワシントン　ホワイトハウス

1909年４月７日

桜樹に関する貴女のご提案大変ありがとう。私は、本件を取り上げ、桜の樹はお約束します。（以下、植栽構想や場所について提案し、シッドモアさんに意見を求めている＝筆者注）

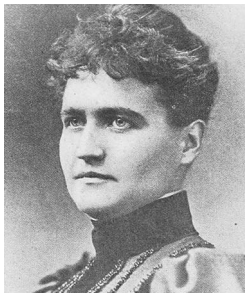
かしこ

ヘレン・ヘロン・タフト

この手紙の差出人は大統領夫人・ファーストレディのヘレン・ヘロン・タフト（Helen Herron Taft、注１）で、「ポトマック河畔に日本の桜並木を作ってほしい」というシッドモアの願いに対する返事であった(2)。

この瞬間、「ワシントンに日本の桜並木を」と、足かけ25年間抱き続けてきたシッドモアの夢が現実のものとなった。「チェリー」と聞けば、「花」ではなく「さくらんぼの実」をイメージするアメリカ人に、映像伝達手段の未発達な時代に、繚乱と咲く桜花の姿を伝えるという、ほとんど無理な仕事を続けてきたシッドモアの努力がついに実った瞬間であった。

タフト大統領夫人からの返事がシッドモアに届いた翌日の木曜日、かねてアメリカに桜を咲かせようという構想を抱いて、ニューヨーク市当局に長年訴えていた高峰譲吉博士が、日本総領事水野幸吉（在ニューヨーク市）



エライザ・シッドモア(3)

ヘレン・タフト(4)

高峰譲吉（30）

水野幸吉（7）

と一緒にワシントンに滞在していた。高峰は、世界最初のバイオテクノロジー製品・消化薬「タカジアスターゼ」の発明と、最初のホルモン「アドレナリン」の結晶化という二つの世界的な業績を挙げたあと、ニューヨークを本拠地として「無冠の大使」と称されるレベルの日米親善に身を粉にして努力を続けていた。

高峰、水野の二人がワシントンを訪問していたのは、アメリカ商業会議所連合団体の招待を受けてその年の秋に訪米する、日本の実業団を迎える準備のためである。この訪問団は、民間人51名で構成され、団長は財界の大物 渋沢栄一であった（注２）。

高峰と水野の耳に、「ポトマックのスピードウェイ沿いに、日本の桜が植えられることになった」という情報が入った。さっそく水野と一緒にタフト夫人に面会した高峰は、その地区いっぱいに桜を植えるためには、計画の1,000本では十分でないと考え、「2,000本私が寄贈した方がよいでしょう。貴女が何かショーをやるのには、それくらい必要でしょうね。これを日本にいる「アメリカの友人から」ということで、受け取ってもらえるでしょうか」と話しかけ、2,000本の寄贈を申し出た。タフト夫人は、夫の大統領ウイリアムに相談の上で、その週の土曜日にこの申し出を受けると高峰に返事した。シッドモアがヘレンに手紙を出してから、わずかに１週間の出来事であった。この瞬間、実質的に「ワシントンの桜」は誕生したのである（5､6）。

水野は高峰の寄贈の提案を「素晴らしいアイディアだ」と賞賛し、「両国の首府の懸け橋として、それを東京市の名前で寄贈してはどうか」と提言した。高峰は、即座にこころよく同意した。ここから日本側は水野、米国側はタフト夫人の主導でこの歴史的なプロジェクトの協議が推進されていく。

上の写真の水野の姿は、水野の友人で品川沖子という俳号の人が、ある雑誌に「無くて七癖」と題して投稿した風貌描写「水野酔香君　右の肩を三寸許り聳やかす」にぴったりのように見える。

●大統領夫人が公共事業

シッドモアに返事を出したその日、すでにタフト夫人は、公共土地建物管理責任者の部下である景観庭園師との相談を開始しているが、かねてから彼女の頭の中には、ある構想が温められていたのは明らかであった。そし

【注1】シッドモアは明治10年代に2度日本にやって来て、足かけ3年間滞在した。その後も横浜の米国領事館に勤務していた兄のジョージを訪ねて何度も来日しているが、著作の一つ『日本・人力車旅情』（『Jinrikisha Days in Japan』）の第8章「東京フラワー・フェスティバル」には、東京の花見風景の詳細な描写がある。

彼女が、最初に「ワシントンに日本の花桜を」というアイディアを思いついたのは、1885（明治18）年であった。この年の秋、日本を旅行していた30歳のシッドモアは、11月10日午後３時、赤坂仮皇居（元紀州藩邸）御苑において行われた観菊会に、皇室から招待を受けた。それからワシントンに戻ってすぐ、「近く埋め立てで出現する予定のポトマック河岸の半島に日本の桜を植えて欲しい」と当局に提案している。

一方、ヘレン・タフトは1904年１月、夫ウイリアムと一緒に初来日したとき、宮中午餐会に招待され、そこでシッドモアに初めて会い、以後、二人の親交は深まっていった。（28）

て6日後には公共土地建物管理官が、ペンシルベニア州の園芸会社から106ドルで二重（ふたえ）の桜「普賢象（ふげんぞう）」90本の購入を開始した。

タフト夫人のこの桜プロジェクトは、アメリカ合衆国の歴史上、ファーストレディが行った最初の公共事業であった。それまで米国では、大統領一家は質素で控え目であるべき、というのが国民の常識で、夫ハワードよりも政治が好きだったヘレンにとっても、かなり勇気の要ることであったと想像される(8)。

驚くことに、ファーストレディになってわずか2カ月後、ヘレンは重い心臓発作で倒れた。大統領就任が3月4日だったので、シッドモアが4月早々に行動を起こし、高峰とヘレンに動機があり、そして水野の機敏な折衝活動があればこそで、もしそのいずれかを欠いていたら、ワシントンの桜はどうなっていたかわからない。幸いヘレンは2年後に回復し、夫ハワードより13年長生きして、年々華やかになる桜並木を思う存分楽しんだあと、ワシントンの自宅で82歳の天寿を全うした(4)。

シッドモアは記憶が鮮明なうちに、この頃の記録を1910年発行のある雑誌の記事に残した(6)。そのエッセイのタイトルは「日本の桜」で、1909年4月のワシントンでの決定的な出来事、すなわち彼女と高峰の桜に対する限りなき愛情と、それをアメリカの地に咲かせたいという執念、それに見事呼応したヘレン・タフトと水野の配慮と行動が劇的に描写されている。文中の「かくて事は成就せり」(,and the thing was done.）という表現は、次に紹介する彼女の水野宛て書簡の内容を一言で表現しており、高峰と一緒に抱いてきた桜の花に対する長年の思いと、こみ上げてくる喜びがよく伝わってくる。

シッドモアはその後すぐ、タフト夫人とお互いに「ワシントンの向島」構想についてかなりの時間をかけて語り合った。その様子は下記のような明快かつ簡潔な手紙（筆者訳）で水野総領事に伝えられた。この手紙の最後の1行は、シッドモアが水野夫人の峯子とも親しく交際していたことを示している。

親愛なる水野様

今日の午後、私はタフト夫人と長い話をしましたが、彼女は自分の描いている「向島」のために、日本からの贈り物として桜の木を戴くことを大変喜んでおられました。

彼女はすでに大変な熱意でこの問題を取り上げ、さっそく彼女の主任庭園師にニューヨークの日本人植木職人と相談させていまして、さらに公共土地建物管理局長であるコスビー大佐に主任庭園師を支援するよう指示していました。

彼女は、自分の「桜の花」に対する興味が、貴殿やお友達によってそんなに高く評価されているのですか、と大変驚いておられました。

私は、「東京市長寄贈」の桜並木はすべてタフト夫人の事業としていただければ、成功間違ありませんと申し上げました。

タフト夫人は、桜苗がシアトルに到着したら担当官が受け取るでしょう。我が国の農務省がシアトルに出張所を持っており、

【注2】1909（明治42）年の秋、アメリカ合衆国商業会議所連合団体の招待を受け、東京・大阪など6大都市の商業会議所などの民間人51名で構成された渡米実業団（Honorary Commercial Commissioners of Japan to the United States of America）と称する日本初の大型ビジネスミッションが、渋沢栄一を団長として98日間でアメリカ合衆国の主要な61都市を訪問し、民間の立場から、日本とアメリカの経済界をつなぐパイプ作りに大きく貢献した。

この訪問団は、出発に先立ち明治天皇から芝離宮で午餐を振る舞われ、帰国の翌年（1910年2月2日）には小村外務大臣主催の帰朝歓迎晩餐会に招待されたが、それには総理大臣桂太郎をはじめ政財界の重鎮多数が参列した。その時の名簿を見ると、この訪問団はまさに国を挙げての大事業であったことがよく分かる。それを成功に導いた水野の功績は、彼の一周忌の参列者名簿が裏付けているように思える。

水野総領事は、この訪問団の残務整理も引き受けており、この帰朝歓迎晩餐会に秘書官の吉田要作と篠野乙二郎を出席させている。(15)

そこに到着する品物は総て監督しますので、そこからの安全な汽車輸送も手配可能です、とおっしゃいました。

私は重ねて貴殿のご厚意と贈り物が将来ワシントンの美を生みだし、これから先、長い年月我々がそれを持つ喜びを共有できると確信します。奥様にくれぐれもよろしく。

かしこ

（サイン）エライザ・R・シッドモア

●気配りこめた公文書

これを受けて水野総領事は、外務大臣小村寿太郎宛に「華盛頓へ桜樹寄贈の件」という申請書（公第101号）を1909年６月２日に送信した(9)。その内容の主要点を箇条書きにすると、次の通りである。

＊タフト夫人はかねてから、ポトマック河畔の美化を念願していた。
＊シッドモアさんたちワシントンの紳士淑女が、資金を集めて桜を輸入して並木を作ろうとしている。
＊私（水野）が「隅田川堤」をポトマックに作ったらと発想し、高平大使の賛意を得てシッドモアさんに提案、タフト夫人の内意を聴取して欲しいと依頼。
＊シアトルからの陸送は米国が引き受けてくれるとのこと。
＊早く桜樹が欲しいとの意向だが、移植時期などの問題もあり、急には無理と回答。

以上の通りの状況で、かつ費用も極めて少額なので、東京市と相談の上、ぜひ実行できるようやって行きたいと考える。

万一、費用につき困難な問題があったら、費用一切は別に工面する方法を講じたいと考えるが、名義だけはなるべく東京市長ということに致したい。

また細かいことではあるが、通告発表のタイミングや方法も、なるべく我々の真の目的に沿うようにするのは当然なので、高平大使からタフト大統領夫人へ書面で通知するか、または今年の秋、渋沢栄一男爵以下実業家数十名が太平洋岸商業会議所の招待に応じて渡米、ワシントンへも来訪されるので、その機会に一行の長老から通知発表するのも妙案ではないかと考えている(注2)。

なお、この公文書には、シッドモアから水野宛の手紙（前記）の写しが添付された。

上記の公文書のうち費用に関する部分は、公文書から約２カ月後に送達された水野から小村宛の「華府へ桜苗寄贈に関する件」というタイトルの公文書（10）の１節によって裏付けられている。水野は確信を持って寄贈の提案をしたと考えられる。その部分を現代語に直すと、次の通りである。

とにかく本官は、下相談がまとまり本官もニューヨークに帰任した上で、高峰博士より在留民の主だった者に相談したところ、いずれの人も賛成し、東京市長が費用の支出が難しい事情があれば、ニューヨーク在留邦人が奮って拠金しようと相談されたので、初めて本省へ稟議を提出し、一方、シッドモア嬢に対しては、「公式のアナウンスメントは、いずれしかるべき筋を通して行う」と申し送っておきました。

小村寿太郎は1901（明治34）年から約5年半、桂内閣で第18代外務大臣を務め、その間に日露講和条約の締結という歴史に残る偉業を成し遂げた。そして1906年1月に一度退任したが、後任の４名の外相が次々辞任したので、小村は1908（明治41）年に再び桂太郎に請われて2回目の外務大臣に就任していた。

水野の申請書にすばやく同意した小村外務大臣から指示を受けた石井菊次郎外務次官は、東京市長尾崎行雄宛に、東京市の名前での桜樹の寄贈を検討するようにという正式依

頼書を７月２日に送達した(11)。それには、水野からの上記申請書（公第101号）の写しが添付されていた。当時は手紙が米国東岸から東京に届くには相当な日数を要するため、外務省は内容の要約を電信で同時に発信して意思の疎通を図ってはいたが、１カ月の間に水野の要望が東京市に伝わったのは、小村と水野の間に大変厚い信頼関係があったことを示している。

石井外務次官から要請を受けた尾崎市長は、とりあえず受諾の回答を８月20日に送付し(12)、６日後の26日には寄贈の趣意には至極同感であり、外務省の折衝に感謝する旨述べて、「苗木２千本を準備することに決定した」と正式に回答した(13)。この東京市受諾の情報は、翌日外務大臣から駐米大使に電報で伝えられ、米国政府にも知らせるよう指示された(14)。

●水野は夫人を同伴せよ

ここに、水野総領事が小村大臣に、気軽に公文書で桜の寄贈を上申した背景の一つとして、次の二つの事実を紹介しておきたい。

一つは、先述のアメリカ商業会議所連合団体の招待を受けた日本の渡米実業団が横浜を出発する一カ月前の1909年７月のことである。小村は直接水野に次のように訓令した。

「今回渡米する実業団を指導し、各地歓迎交歓に対し、主客双方を満足せしむるため、同行を命ずるにより、９月初旬実業家のシアトル着を待受け、終始同伴旅行すべく、なお一行中には夫人の数少なく、米国側の希望に副い難い事情があるにより、水野は夫人をも同伴すべし」

小村は水野の妻峰子が、こういう気遣いを要する任務を引き受けられる人物であることをよく認識していたと考えられる。

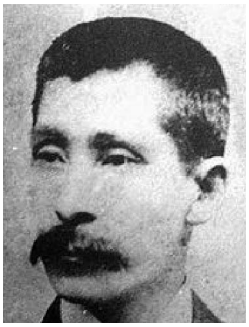
もう一つは、この実業団がシアトルから汽車で東に向かって視察旅行を続けている途中での出来事である。水野がミルウォーキーで一時実業団を離れ、訪米中の東久邇宮邦彦殿下（昭和天皇の皇后の父）に随行するためニューヨークに戻る予定であったが、団長の渋沢栄一が「どうしても水野に面倒を見てもらわないと視察団の行動が困難になる」と電報で小村大臣に訴えた。小村は米国と協議し、殿下随行に松井代理大使を充てることにし、水野に引き続き実業団の面倒を見るように電報で訓令している(15)。

このような小村と水野の人間関係は「ポトマックの桜」実現にとって、大きな役割を果たした。

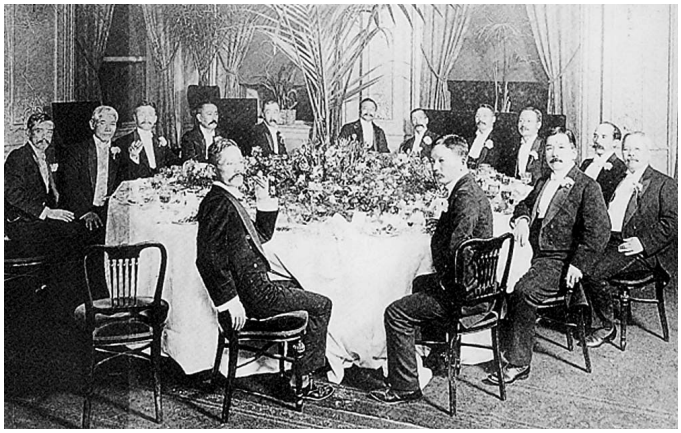
当時日本は日露戦争で勝ったとはいえ、ロシアから賠償金も取れず、国内外で大量に発行した戦時国債の償還（25億円の借財に対し年間１億円の利払い）に苦しむような国情で、明治天皇は戊申（ぼしん）詔書を出して、国民の勤倹、勉励を訴えていた。

外務省は東京市の財政状況を心配して、横浜からシアトルまでの輸送費につい日本郵船株式会社第３代社長の男爵 近藤廉平に、特段の配慮を依頼したところ、近藤はこの日米友好の快挙を意気に感じ、「国交上の関係を重んじて一層奮発、全く無賃にて運搬しましょう。なお、当社の趣意を米国政府に貫徹されることを希望します」と回答した(16)。嵩が高いだけでなく、植物という生き物を３週間も船内で管理する労務を考えると、さすが渋沢栄一に次ぐ財界の実力者であった近藤ならではの快挙で、明治時代の男気というものが感じられる。

実務を指揮した当時の日本郵船横浜支店長･永井久一郎は、明治の文豪永井荷風（壮吉）の実父で、その年、荷風は29歳で、『すみだ川』や『ふらんす物語』を発表し、文壇に本格的に登場している。また前年、新聞に連載され好評を博した夏目漱石の『三四郎』が、この年早くも単行本になり、その中で漱石は、広田先生に「日本は亡びるね」と語らせ、鋭い警告を発している。日本が軍国時代



小村寿太郎（21）



1905年ニューヨーク日本クラブにて日露講和全権団を歓送する
高峰譲吉（右端）（21）

へ傾斜を始めた時期でもあった。

水野総領事から小村大臣あての申請書の日付から一カ月後の7月2日、高平小五郎駐米大使は小村大臣に「桜寄贈の件の実施をしばらく待って欲しい」と訴える電報を打った。水野が抜け駆けをしたというのである。それから始まる大使と総領事の間の葛藤は、詳述することを躊躇する内容であった（17,18、19、20）。

この仕事は総領事の担当分野であると理解していた小村は、いわば内輪げんかのような内容の計3通の手紙にいささかうんざりしたのではないかと想像されるが、それらの書簡には、当時を物語る興味ある実情が含まれている。すなわち寄贈に必要な費用の下相談がニューヨークの財界中心になされていたこと、高平からタフト大統領の意向を聞いて欲しいという依頼を受けた米国務大臣（日本の外務大臣）ノックス（Philander C. Knox）が、それよりも避暑旅行を優先してすぐに返事をしなかったこと、そしてシッドモアが高平大使をちょっと煙たく思っていたことなどである。

幸い、タフト大統領の寄贈受諾の意向を国務大臣ノックスから伝えられた高平大使は、すぐに公式文書を発送し、その翌日小村大臣に電報で、実施して差し支えなしと訂正を伝え、内輪もめの1件は落着した（18,19）。

●生かされた分厚い人脈

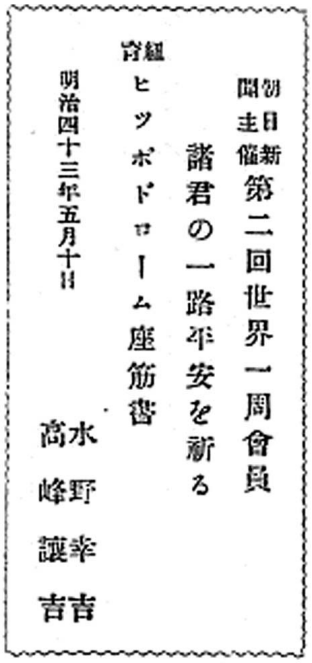
このように日本政府関係者は実に機敏に対応したが、その背景として、登場人物の人脈について少し紙幅を使って彼らのつながりを記しておきたい。

（1）高峰と小村……幕末に生まれ、明治の偉人として歴史に名をとどめた高峰譲吉と小村寿太郎の二人は、若いころ長崎に留学し、長崎藩校致遠館（ちえんかん）のフルベッキ先生に英語を習った兄弟弟子であった。一つ年上の高峰は小村の入学時に加賀藩に戻っていたので、同じ教室で学んだことはなかったが、英語で世界への目を開かれた強烈な記憶は、生涯共有していた。それから36年後、アメリカ在留邦人の中心となっていた高峰と、外務大臣の要職についていた小村が、国運をかけた日露戦争講和談判（1905年）の機に再会する。

上の宴席の写真は、日露講和全権団がニューヨーク日本倶楽部に招かれて歓談している様子である。この倶楽部の創立者であり会長でもあった高峰（右端）が主催しているが、その右隣には金子堅太郎、そして中央には小村が座っている。

（2）高峰と金子……1904年、国家の浮沈をかけて超大国ロシアに宣戦を布告した明治政府は、戦費調達に腐心していたが、その一つの

ハーヴァード大学留学生仲間。後列右から2人目が金子堅太郎、3人目が小村寿太郎 (24)



朝日新聞主催
第二回世界一周會員
諸君の一路平安を祈る
寄組ヒツボドロー ム座筋書
水野幸吉
高峰譲吉
明治四十三年五月十日

招待状 (7)

方法が国債を外国で買ってもらうことであった。ローズヴェルト大統領とハーヴァード大学で同窓だったという理由で、アメリカの世論をそれまでの「ロシア贔屓(ひいき)」から「親日」に転換するようにという重大な使命を背負わされて、総理大臣伊藤博文に送り出されたのが金子堅太郎であった (22)。

金子の米国各地での名演説は、世論を変える威力があったものとして歴史に残ったが、彼は夫人を帯同しなかったので、男一人では務まらない演説会には高峰夫人のキャロラインが同行して代理を務めた。後に金子は「高峰夫妻の協力なくしては、自分は到底責任を果たせなかったと思う」と述懐している。

(3) 小村と金子……時代は遡るが、1875（明治８）年に第１回官費留学生に選ばれた小村は、東大での成績が優れていたので、無試験で名門の米国ハーヴァード大学のロースクール（Law School、法学部）に入学した。当時そこに在学していたセオドア・ローズヴェルト（Theodore Roosevelt）が、後に大統領となり日露講和を仲介することになる。小村には米国留学時代に、いわゆる刎頸(ふんけい)の友がいた。それは、明治時代後半に伊藤博文の厚い信頼のもと大活躍する金子堅太郎（1853～1942）であった。金子は、1876（明治9）年、福岡藩からの留学生としてハーヴァード大学法学部に送り込まれたが、さっぱり勝手がわからず困り果てて、１年前から来ていた小村（年齢は二つ下）を頼って、小村の下宿にやって来て居候したのだが、そこは月10ドルのとんでもない安下宿で、一つの寝室に一つしかないダブルベッドに小村と金子の二人が寝ることになった時期もあった (21)。

このように１歳ずつ違う金子、高峰、そして小村の３人は、お互いを知り尽くした間柄であった。外務省関係の通信文書に出てくる民間人高峰の存在は、高峰の仕事仲間であった渋沢栄一、益田孝とともに、政府の小村、金子の二人には身近なものであった。

(4) 高峰と水野……総領事の水野と在留邦人の代表者であった高峰とは、ニューヨークが活動の舞台であったので、密度の濃い交際があった。

日本の渡米実業団を迎える準備のために二人そろってワシントンを訪問していたことは先述の通りだが、上に掲載する１通の招待状

も、二人の緊密な関係を示している。

これは、水野が桜苗寄贈の申請をした翌1910年５月、日本からの民間訪問団を演劇に招待したときの連名の案内状である。このヒッポドローム座は、演劇あり曲馬ありの当時かなり有名なヴァラエティー・ショーであったようで、渡米実業団もこの前年に観劇している(6)。

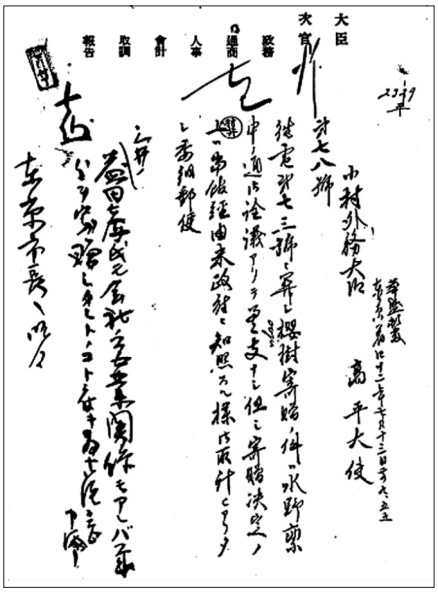
高峰は1905（明治38）年、滞米邦人の親睦のためニューヨークに「日本倶楽部（The Nippon Club）」を創設し、初代会長を勤めた。後に水野幸吉は総領事として着任後、副会長に推挙されている(6)。この倶楽部が創設された年に日本海海戦に勝利した日本政府は、ローズヴェルト米国大統領の仲介のもと、ポーツマスでロシアとの講和会議を開催し、国運をかけた2年間の戦争に結末をつけていた。

この高峰会長と水野副会長のコンビの緊密なコラボレーションは、引き続き日米親善に多くの成果をもたらしたが、「アメリカの桜」や「日米経済交流促進」は、その中でも特に大きなものであった。

それから4年後の1909年に、前述の日本の経済使節団長が全米を巡るのであるが、シアトルから大陸を鉄道で横断する途中、タフト大統領は自分の遊説の日程を繰り合わせて、「ミネトンカの湖畔にて」という曲で有名なミネソタ州の風光明媚な観光地のラファイエット倶楽部で実業団一行の歓迎会を開催した。当時すでに６回も訪日していた親日家のタフトが、当時カリフォルニア州を中心に問題となり始めていた日本移民排斥運動に配慮した演説をした様子が、ワシントン・ポストとニューヨーク・トリビューンに報じられている(15)。

さらに3年後、明治が幕を閉じる1912年、ワシントンのすぐあとニューヨークでも開催された盛大な桜植樹祭での記念の演説で、最後に立った沼野安太郎日本総領事は、友好的なスピーチの中で大変重要なことに触れている。

「当時既に一部の杞憂家が日米両国間に戦



駐米大使からの公文書に書き込まれた小村外務大臣のサインと、東京市長へ連絡するよう指示している「三井益田孝氏云々」というコメント(18)

争が起こると公言することが時々あるが、それは民衆扇動家による、あるいは身勝手な隠れた動機からの発言であることを、我々全員は学んで知っている。アメリカ人同様日本人も平和を愛する民族である。米国と日本は互いに好意と融和を保持しなくてはならない。両国は太平洋の運命をコントロールし、常に調和と理解のもとに行動しなくてはならない。我々の友情に疑いが生じたり、利害が衝突することがあってはならないことは、我々全員の真の願望であり、それが私の信念であり確信である」

高峰も水野もすでに、そういう可能性のあることをうすうす感じ取って、そのため懸命に日米友好を深めようとしていたのだが、1914年の水野の死、1922年の高峰の死からわずかの時を経て両国は、1941年12月8日に太平洋を挟んで戦に突入し、彼等の杞憂が現実となるのである。

(5) 渋沢、益田と高峰……この時代の政官界と太いパイプで結ばれていた財界の巨頭、銀

経済使節団長・渋沢栄一夫妻（23）

経済使節団長を訪米全行程誘導した水野幸吉駐米総領事（23）

ジョージ・シッドモア（27）

行の創始者渋沢栄一と三井物産の大番頭益田孝そして高峰譲吉の三人は、共同で日本最初の人造肥料会社（現在の日産化学）を創設した親しい仲間であった。

トップ企業のリーダーとして、大変興味ある益田の行動の記録が下に掲げる公文書に見られる。小村大臣が1909年７月13日に高平大使から受け取った電報の余白に、

「三井の益田孝からも桜樹の寄贈に応分の参加を申し出ている」

と書き込まれているのである（18）。他の関係文書には、益田はどこからか桜寄贈の話を聞き込んだと書かれているが、それはおそらく高峰からの直接の情報であっただろうと考えられる。益田のこの申し出は、東京市長にも伝えられており、１カ月半後には外務省通商局長から益田に、「どうされますか？」と問い合わせているが（25）、その結果がどうなったかについては、資料が残されていないようである。

（6）渋沢と水野……前述のように、渋沢にとって仕事人生の総決算ともいうべき渡米実業団団長としての任務を果たすに当たって、最も頼りにしたのは水野であった。水野が小村大臣に、桜の寄贈を渡米実業団の「長老」から発表するのも一案だと提案しているが、それは団長・渋沢栄一を念頭においていたことは明らかである。

この訪問団が滞米中、明治の元勲伊藤博文がハルビン駅頭で安重根に暗殺されるという大事件が発生した。外務省の連絡網でこの重大なニュースをキャッチした水野は、これをいち早く渋沢に伝えた。一番速い情報伝達手段である電報がまだそれほど自由でなかった時代だけに、渋沢は生涯この水野の配慮に感謝していたという。

水野が帰朝後、訪問団を引率した経験を早稲田大学で講演しているが、「どちらかというと保守的な団員も視察後、目を見開いて若者の意見も取り入れるであろう」と経営者の視野の広がりを述べるとともに、「経営をもっと合理化しなければ駄目だ」と警鐘を鳴らしている。特に、日本経済の生命線である生糸の輸出が、中国の新製品開発に押されて伸び悩んでいることにもっと危機感を抱くよう、また卓上電話と自動車の利用を急ぐよう、さらに折衝に時間を使いすぎている、商談はイエス、ノーで充分だと述べているのは、現代でも通用するような気がする（7）。

（7）シッドモア兄と高峰……高峰は日本酒の醸造技術を応用したウイスキーの新製法を発明し、それを基盤に新天地で事業を起こそうと1890年の晩秋に一家を挙げて米国に移住した。その前年に登録された高峰の新醸造法の

米国特許の明細書の最後に記載されている二人の証人（Witness）のうちの一人G. H. Scidmoreは、シッドモアの兄、当時の神奈川領事館の副領事ジョージ・ホーソン・シッドモアで、彼はイギリス法律学校（中央大学の前身）の教師をしている弁護士でもあった。その時代、特許は無審査であったが、証人の保証が要求された(29)。おそらく高峰はシッドモアよりも先に、兄のジョージと知り合いになったと思われる。ジョージはきっと、妹エライザがワシントンに住んでいることも高峰に伝えたに違いない。

●挫折を越え植樹に成功

日米友好に理解の深い人たちによってスムーズに進展した桜移植の事業は、東京市の不手際で1910年初め大きく頓挫した。東京市が手配した桜の苗木が、全部病害虫の寄生を受けていることが米国農務省による検査で発見され、「全樹焼却」という決定がタフト大統領のサインを得てワシントンで実施されてしまったのである。

東京市には任せられないと判断した小村は、農事試験場の場長・古在由直博士はじめ専門家に健苗育成を依頼し、多くの関係者の２年間の懸命な努力によって、今度は寄贈を受けた米国の専門家が「こんなに見事な輸入植物を見たことがない」と感嘆するような桜の若木が、1912年の春、無事ポトマック河畔とハドソン河畔に移植された。シッドモア、タフト、高峰、水野の強い思いが、見事な花を咲かせることになった。今日この4人の着想が、毎年春に世界から100万近い観光客を呼び寄せている。

●苦学しても忘れぬ快活

水野幸吉は1873（明治６）年、姫路龍野町に生まれた。父尋樹は元尾張の徳川藩士で、勘定吟味役であったが、明治維新となって東京に出て、刑部省の役人になった。1872（明治５）年に兵庫県庁に転職、さらに4年後には淡路島洲本の支庁に移動を命じれたのは、おそらく旧徳川藩士のため、薩長土肥出身者によって中央から退けられたのではと想定される。母は幸吉を産んだあと産後の肥立ちが悪く、幸吉に愛情を注げたのはわずか5年間でこの世を去った。その後、幸吉は転々とさまようような少年時代を送り、姉栄子を頼りに苦学を続け、明治18年京都平安義黌（ぎこう）を経て第三高等中学校（旧制三高）に学んだ。

ポトマック河畔の満開の桜。灯篭は1954年に日本から寄贈された。慶安4年初点灯から350年後の姿＝2001年4月Emi Nakatsugawa撮影

そのころ水野が姉の栄子に書いた手紙は、彼の悲壮な生活を物語り、読み出すと胸が熱くなる。それはこの時代の優れた若者が読んだ中村正直の『西国立志伝』（サミュエル・スマイルズ『Self Help』の邦訳本）そのもののような苦闘の青春を示しているので、一部を短く写しておきたい。

「姉上よ、小生の今の身の上の如何なるかをご存じでしょうか。先日まで兄の宅に居候していましたが、兄の都合ですげなく追い出されました。今の下宿では、3人の子供の家庭教師、そのうえ夜学校に教えに行く。夜９時に帰宅してやっと初めて勉強できる。この

京都で学友と。後列真ん中が20歳の水野幸吉
＝明治26年（7）

6日に大試験、及第したら専門2年、それから大学。肩書きではもう世の中は通用しない、実力の時代です。水野の家名をあげ、老いた父の境遇を安泰にし、姉様を楽にさせることをお望みなら、このところ一番ご助勢下さいませんか。大学は徳川様や加藤高明さんやその他の尾張から来た人の立てている愛育社から貸費が出るはずなので、この三高にいる間だけです。ここで挫折するくらいなら、三高に入らなきゃよかった。姉上よ、小生が今わずか2カ年の学資のために、大なる損をなすことを不憫に思し召さるなら、水野家から一人の名高き人物を出すことをお望みなら、いま2年間の資金を恵み給え。1カ月7円で何とかやります。」（筆者現代語訳）

もう一通の手紙では、机、本棚はもちろん、毛布も1円50銭の靴も買えない状況を詳しく姉に訴えている。この姉の栄子は外交官寒河氏の妻であったと考えられるが、当時中国勤務であったらしく、手紙の宛先が「支那九江佛国領事館」となっている。当時は一度嫁すと、実家の面倒をみるのは容易なことではなかった。

水野の友人で国文学者であり俳人でもあった佐々政一博士は、その頃の水野を次のように回想している。

「故人は、実に苦学をした人である。しかし、その逆境にありながら、豪も屈託の色を見せず、いつも快活に立ち回って、よく他人の世話までしたのは、常に敬服していたところである」(7)。

このような苦節を何とか乗り切って、愛育社の奨学金を受け、1897（明治30）年に東京大学政治学科を卒業した水野は、すぐに外交官試験にパスし、最初の任地韓国から外交官としての第一歩を踏み出した。2年後にはベルリン勤務となり、1901年12月に清国の芝罘（チーフー）（現在の中国煙台あるいは烟台）に転任した。ここでの任期中に日露戦争が始まるのだが、彼はロシアの旅順艦隊が突如出港したことをいち早く本国に打電している(31)。その後、漢口勤務を経て1907（明治40）年9月に1等書記官に昇進し、12月にニューヨーク総領事となる。上司の小村寿太郎は、東京大学政治学科を1875（明治8）年に卒業しているので、22年後輩の水野は将来を嘱望される存在となった。

●米国人にも愛された人

日本海海戦の勝利に酔った国民が、小村外相が賠償を取れずにポーツマス講和条約を締結したことに激怒し、1905（明治38）年9月5日有名な「日比谷焼き討ち事件」を起こし、物情騒然としたとき、水野は一時中国から帰国していた。事件の3日目、友人の設けてくれた歓迎会で、蒼くなっていた大方の外交官を前にして水野は、「野分して辻交番の夜火事かな」と、のん気にうそぶいていたという。

朝日新聞記者、随筆家、そして俳人であった杉村楚人冠（そじんかん）（廣太郎）は、ニューヨークで水野総領事に初めて出会ったときのことを次のように書き残している 。杉村には在日アメリカ公使館通訳の経験があった。

――「紐育駐在帝国総領事水野幸吉君」と名前だけ聞いたら、いかにもハイカラな優男の様に聞こえるが、会って、さて、「かねて想像していた顔」ではない。でっぷりと太っ

水野幸吉最後の正装（7）

東京目黒の祐天寺にある水野幸吉・酔香（1914年5月23日没）の墓＝筆者写す。長女の山東子（1917年10月11日没）、妻の峰子（1940年6月5日没）がともに眠る

た、丸顔の赤ら顔の、余り格好のよさそうにもない八字髭を生やした大きな男で、何か喋る時は、ごつごつした弁で、頬に蛮声を振るうところ、どうしても「水野幸吉」という姿でない。どちらかというと、その風采は紐育（ニューヨーク）式というよりも、むしろ前任地の漢口式に近い。初対面早々僕はいささかたじたじと来た――

楚人冠は、水野の挨拶も演説も紋切り型の総領事風でなく、いわば型破りの官僚であったことに強い印象を受けたようである。

水野死去１年後の追悼の集まりで、東大の同窓生であった美濃部達吉博士は、「故人は一向に勉強もしなかったが、そのくせ、いつも好成績を得ていた。要するに多情多感にして、しかも才気煥発な人であった」と、回想の辞を述べている。

渋沢栄一は、水野が米国で挙げた大きな成果を偲んで、次のような言葉を残している。「故人が米国で成功したのは、故人が米人を好んだからではなく、むしろ米人が故人を愛していた故である」。

水野が、かなり豪放磊落（らいらく）な人で、特性を遺憾なく発揮して人脈を作りそれを活用したことは、この親しかった三人の著名人のコメントが物語っている（7）。科学実業家の高峰が、水野と二人三脚で日米親善に大活躍することができたのも、大いに水野のこの性格によっていると考えられる。

水野は「酔香」という号を持つ俳人として、学生時代から生涯を通して活発な行動を展開した。明治23（1890）年には、京都で次のような句を『平安学生』という雑誌に投稿した。

――“長き日を囀（さえず）り足らぬ雲雀かな”、 記し畢（おわ）れば三更の寺鐘頭上に響き、洛東黒谷山雨蕭々（しょうしょう）たり。適翠館にて――

彼の一周忌に参列した俳句仲間の多さは、俳人としても水野の生涯の豊かさを示している。彼は小説にも興味があって、学生時代に『我が恋』『春田静子墓誌引』という２編を書き、ジョナサン・スイフトの伝記の翻訳もやるという多才ぶりである。

●現地で惜しまれ突然の死

水野は１911（明治44）年、思い切り活躍したニューヨークを後に、清国公使館に転出し、2年後には北京公使館に移り、翌1914

（大正３）年５月現地で急死する。

ちょうど中国を訪問していた渋沢栄一は、3度も見舞ったあと２日目に仕事を終わるや水野の臨終に駆け付けたが間に合わず、愕然と肩を落とし「慨嘆ノ到リナリ」と書き残している（15､26）。そして6月16日の水野の葬儀で捧げた渋沢の弔辞は、短いが心の底からの哀悼で、とりわけ1909年の訪問団に対する絶大な支援に感謝している（7）。

東洋、西洋での豊富な経験を基盤に、文人としての深い教養と豪放磊落な個性を存分に生かして、いよいよ外交の主役としての活躍を期待されていた水野の急逝は、腹膜炎が原因であったが、個人にとっても国家にとっても惜しまれる死であった。今は、東京目黒の祐天寺に眠っている。

日米友好の永遠のシンボルである桜の寄贈という事業を、国家レベルで推進してくれた小村寿太郎が移植の成功を知ることなく、1911年にこの世を去ったこと、そして、すくすくと成長する桜を見ることを許さなかったその3年後の水野の死は、シッドモアにとっても高峰にとってもまことに残念なことであった。

（歴史記述として敬称を略させていただいた）

引用文献

（１） American National Biography（1999）

（２） History of the Cherry Trees in Washington,D.C. http://www.nps.gov/nacc/cherry/history.htm（2010）

（３） R.M.Jefferson and A.E.Fusonie：The Japanese Flowering Cherry Trees of Washington, D.C., A Living Symbol of Friendship.National Arboretum Contribution No.4, U.S.Department of Agriculture（1977）

（４） 「First Lady」の中のタフト大統領夫人の伝記（アメリカ文化センター蔵）

（５） Oliver Martin:“How the Japanese Cherry Trees Came to Washington”Chesapeake and Potomac Telephone company,Transmitter,Apr.1934

（６） The Century Magazine, March 1910, Vol.79, No.5 “The Cherry Blossom of Japan—their season a period of festivity and poetry” Eliza Ruhamah Scidmore

（７）『酔香遺芳』 出版者水野幸雄（1915）

（８） White House Gear、whitehousegear.com/cherry-arch.html

（９） 在紐育総領事水野幸吉より外務大臣小村寿太郎宛「公第101号」、1909年6月2日

（10） 在紐育総領事水野幸吉より外務大臣小村寿太郎宛「機密第10号」、1909年8月17日

（11） 外務次官から東京市長宛の文書（2893号）、1909年7月2日

（12） 東京市長から外務次官宛の文書、1909年8月20日

（13） 東京市長から外務次官宛の文書、1909年8月26日

（14） 小村外務大臣から松井駐米代理大使宛の電報（2017号）、1909年8月27日

（15） 巌谷季雄編『渡米実業団誌』（1910）

（16） 日本郵船社長・近藤廉平から外務省通商局長・萩原守一宛て書簡、1909年9月20日

（17） 高平駐米大使から小村外務大臣宛の電報、1909年7月3日

（18） 高平駐米大使から小村外務大臣宛の電報、1909年7月13日

（19） 高平駐米大使から小村外務大臣宛の書簡「公第127号」、1909年7月13日

（20） 水野総領事から小村外務大臣宛の書簡「機密第10号」、1909年8月17日

（21） 小村捷治著『骨肉』鉱脈社（2005）

（22） 司馬遼太郎著『坂の上の雲、開戦へ』

（23） 米国オークランド・トリビューン紙 1909年11月26日夕刊

（24） 桝本卯平著『自然の人小村寿太郎』伝記叢書172 大空社（1995）

（25） 外務省通商局長から三井物産益田社長宛の書簡、1909年8月30日

（26） 渋沢青淵記念財団龍門社編纂『渋沢栄一伝記資料』第32巻、渋沢栄一伝記資料刊行会（1960）

（27） The Japan Gazette,1922年11月28日

（28） 『合衆国首府 ワシントンの桜』 東京都、1960（昭和35）年発行

（29） 恩地薫 近代日本の創造史、第4号、p.41（2007）

（30）“TAKAMINE Documents from the Dawn of Industrial Biotechnology”Miles Inc. Elkhart, Indiana, USA（1988）

（31） 日本外交史辞典（旧版）、p.920、外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会編

（引用文献無記載の写真は、Wikipediaより収録）

＊＊＊＊＊

いしだ・みつお 1931年生まれ。1954年京都大学農芸化学科卒業。三共株式会社勤務。農学博士。日本農薬学会名誉会員。NPO [近代日本の創造史懇話会] 理事・事務局長。